

令和 2 年 4 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02753

研究課題名(和文)形態部門と統語部門にまたがる文法化と構文化についての統語論的研究

研究課題名(英文) A Syntactic Approach to Grammaticalization and Constructionalization that Span Morphological and Syntactic Components

研究代表者

小川 芳樹 (Ogawa, Yoshiki)

東北大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：20322977

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：D構造が破棄され、分散形態論が採用された生成文法の極小主義プログラムのもとでは、統語操作が「語」の内部に及ぶことも、拘束形態素が自立語に変化したり、自立語が拘束形態素に変化することも、原理的には可能になっている。これを踏まえて、本研究では、日英語の複合語や名詞的繫辞構文や尺度名詞・形容詞構文や主格属格交替などの構文が、100~200年程度の短期間で、いわゆる「語」の境界をまたぐ形で、その統語サイズを通時的に拡大または縮小してきたという事実を、歴史コーパスの調査と、20~70代の異なる世代を対象とする大規模容認性調査をもとに明らかにし、それらの事実をマイクロパラメータ統語論のもとで説明してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、100~200年程度の短期間ではほとんど、あるいは全く変化しないと考えられてきた自然言語の統語構造が、特に言語接触などの社会的要因によらなくとも変化し得ることを、歴史コーパスの調査と、異なる世代間をまたぐ大規模容認性調査の結果に基づいて示したことが、研究成果の学術的意義である。社会的意義は、筆者が主宰する「言語変化・変異研究ユニット」の活動として、本科研費の採択期間である4年間に計3回のワークショップ、計8回の公開講演会・チュートリアル、計2冊の論文集と1冊の翻訳書を刊行し、類似の研究をする研究者に対して、今後の歴史言語学・史的統語論・形態統語論の進むべき方向性を示したことである。

研究成果の概要(英文)：Under the minimalist program of linguistic theory in which D-structure is abolished and distributed morphology is adopted, the apparent notion of “word” is no longer definable and a syntactic operation can apply even to a bound morpheme. This move also enables us to provide an explanation of phenomena in which morphosyntactic constructions undergo diachronic change from a bound morpheme to a free morpheme (or vice versa), from a lexical category to a functional category, from lexical compound to phrasal compound, and so on, in the realm of parametric syntax.

On the basis of these basic ideas, I have made a number of corpus studies and a set of large-scale surveys of acceptability judgment on various morphosyntactic phenomena including compounds, nominal copula constructions, measure noun/adjective construction, and nominative/genitive conversion, and the previously unnoticed facts of diachronic change which I discovered was given an explanation in terms of microparametric syntax.

研究分野：形態統語論

キーワード：形態統語論 史的統語論 ミクロパラメータ統語論 主格属格交替 尺度名詞構文 名詞的繫辞構文
歴史コーパス 世代間差

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

D 構造が破棄され、分散形態論が仮定される生成文法の極小主義プログラムのもとでは、統語操作がいわゆる「語」の内部に及ぶことも、拘束形態素が自立語に変化したり、自立語が拘束形態素に変化することも、原理的には可能であるとみなされるようになった。この理論的背景を踏まえると、認知言語学や通時的構文文法で取り上げられることが多い通時的な文法化・構文化や語彙化の現象の多くも、生成文法のパラメータ統語論の枠組みのもとでの説明が可能になる。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究では、形態部門と統語部門にまたがる文法化と構文化についての統語論的研究を行った。具体的には、英語と日本語の複合語や名詞的繫辞構文や絶対尺度名詞・形容詞構文や主格属格交替などの統語構文が、100~200年程度の短期間で、その統語構造のサイズや許容される変異の幅を著しく変化させてきたという事実を明らかにすることを主な目的とした。これらの研究から得られた成果を統語理論で説明するためには、統語部門は、Chomsky (2001, et seq.)で仮定されているほど安定的で均質的(uniform)なものではなく、むしろ、Kayne (2000, 2005)が提唱する「マイクロパラメータ統語論」のもとで想定されるような微細な統語的変異を常に生み出し続けており、また、Lightfoot and Westergaard (2007)や Biberauer and Roberts (2012)や Lightfoot (2018)などで主張されるような微細な統語的变化を引き起こし続けていると仮定しなければならないことを意味する。

3. 研究の方法

歴史コーパスの調査、刊行物から目視で用例を拾う調査、20~70代の異なる世代の日本語母語話者、計数百人規模を対象とする大規模容認性調査とその結果の統計処理の3つを柱として、現在も進行中の通時的統語変化の事実を発掘するとともに、既存の統語仮説のもとで、それらの事実が説明できるかどうかを検証する。説明できない場合は、それを説明する新たな統語的仮説を提唱し、その妥当性を別の言語データとも照合しつつ検証するという仮説演繹法を採用している。

4. 研究成果

本研究テーマのもとでの主な研究成果は、以下の6点が挙げられる。

(1) 主格属格交替：

過去130年の間に、属格主語文の統語サイズがCPからTP, vPを経てVP/APという最小サイズにまで縮約し、その一部は語彙化すらしつつあること、また、若い世代ほど、属格主語文に対して許容する統語サイズが小さいことを実証した。また、「そこに太郎が/のいるはずがない」のような形式名詞の補文内で生じる主格属格交替について、形式名詞の文法化と脱名詞化により、当該補文内の属格主語は過去100年間で著しく頻度を減らしつつあること、また、ここでも、若い世代ほど属格主語文の容認性が低い傾向にあることを立証した。

(2) 反意語並列構文・等位接続構文：

日本語には、「背が/の高い低い(によって生き方まで変わってくる)」「太郎が/の来ると来ないと(で、雰囲気は全然違う)」のように、反意語の形容詞または動詞どうしを並列または等位接続することで全体が名詞になる構文がある。この構文は、一見、(1)の主格属格交替と似た振る舞いを示すが、コーパス上は、属格表現を基盤とし、主格も許す方向に言語変化が進行中であること、また、主格主語文も属格主語文も、高齢世代ほど容認性が低い傾向にあることなどを立証した。その上で、この特殊構文の通時的発達には、Ogawa (2014)、小川(2016)が主張するところの「統語的構文化」が関与していること、また、Scalise et al. (2009)の考察も踏まえて、反意語である動詞や副詞の等位接続が名詞句を構成するのは、英語や中国語やイタリア語など世界の数多くの言語にも観察される普遍的な現象であると論じた。

(3) 名詞的繫辞構文：

「犬の子(ども)/子どもの犬」のように名詞的繫辞を挟んで主語と述語が倒置を起す構文や、「高さ3000m/3000mの高さ」のように、述部倒置が起きたときにのみ名詞的繫辞「の」が現れる構文について、その通時的発達の過程を、歴史コーパスを用いて調査した結果、述部倒置が起きる前の構文(「犬の子/高さ六尺」など)は平安時代から存在したが、述部倒置を伴い、名詞的繫辞が義務的となる構文(「子どもの犬/180cmの高さ」など)は明治時代以降に現れ、今もその頻度を増やしつつあることを発見した。その上で、これらの述部倒置構文が可能になるには、

機能範疇 D が RP のみを選択するパラメータ値から、機能範疇 D が RP も FP も選択できるパラメータ値への通詞的变化が必要であると論じた。

(4) 尺度名詞・形容詞構文：

上記の「X は高さ(が) 3000m だ」のような尺度名詞構文は、英語では、X is 3000m high.のように尺度形容詞構文に対応する。一方、現代日本語では、「X は 3000m 高い」は、絶対尺度を表す尺度形容詞構文としては容認されない。しかし、大正時代までの英語では、同様の尺度形容詞構文が絶対尺度構文として認可されたこと、また、「X は高さが高い/低い」のような冗長表現が、明治時代以降に使われ始め、現代にかけてその頻度を増しつつあること、また、「X は人気が高い/湿度が高い」などのように dimension (Kennedy and McNally (2005))を形容詞から独立させて表示する構文が、現代日本語では可能だが英語では不可能で、英語では、popular/humid のような形容詞一語で同じ意味を表現しなければならないといった事実に対して、日英語の尺度名詞構文と尺度形容詞構文に対して統一的な基底構造を仮定し、多重主語構文の可否に関するパラメータを仮定することにより、これを統一的に説明した。

(5) 幼児の発話を CHILDES に公開：

筆者は、2011 年から現在まで、筆者の長女および次女の最初期からの発話を記録し続けている。このうち、長女の 0 歳 9 ヶ月から 4 歳 2 ヶ月までの発話を 2016 年 10 月に、その後、4 歳 3 ヶ月から 6 歳 1 ヶ月までの発話を 2019 年 3 月に、CHILDES 内に Ogawa Corpus として公開した。これは、CHILDES の管理者である Brian McWhinney 氏、CHILDES 日本語部門の管理者である宮田スザンヌ氏、国立国語研究所の Prashant Pardeshi 氏、および、東北大学の吉本啓氏の協力を得て実現した研究成果である。また、筆者の次女の発話も、すでに、0 歳 11 ヶ月から 4 歳 2 ヶ月までのものを宮田スザンヌ氏に提出済みであり、これもいずれ、CHILDES の Ogawa Corpus 内に追加公開されることになっている。

(6) 言語変化・変異研究ユニットの主宰：

筆者は、筆者が所属する東北大学大学院情報科学研究科の運営会議での承認を経て、2013 年 2 月に「言語変化・変異研究ユニット」を立ち上げたが、その活動の成果は、本科研費の研究課題遂行中にもいくつも生み出された。上記の Ogawa Corpus、2016 年 10 月に刊行された論文集『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』(開拓社)、2019 年 7 月に刊行された Joan Bybee (2015) Language Change の翻訳書『言語はどのように変化するのか』(開拓社)、2019 年 10 月に刊行された論文集『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2』(開拓社)は、それらの成果のうち主要なものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yoshiki Ogawa	4. 巻 24(2)
2. 論文標題 Diachronic Syntactic Change and Language Acquisition: A View from Nominative/Genitive Conversion in Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interdisciplinary Information Sciences	6. 最初と最後の頁 91-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4036/iis.2018.R.01	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小川芳樹	4. 巻 なし
2. 論文標題 日英語の名詞的繋辞構文の通時的变化と共時的変異	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 レキシコン研究の新たなアプローチ	6. 最初と最後の頁 81-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 新国佳祐・和田裕一・小川芳樹	4. 巻 24
2. 論文標題 容認性の世代間差が示す言語変化の様相：主格属格交替の場合	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 認知科学 (Cognitive Studies)	6. 最初と最後の頁 395-409
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.11225/jcss.24.395	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni, and Yuichi Wada	4. 巻 44
2. 論文標題 Nominative/Genitive Conversion in Japanese and Syntactic Clause Shrinking Now in Progress	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LACUS Forum	6. 最初と最後の頁 未決定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川芳樹	4. 巻 0
2. 論文標題 コーパスを用いた日英語比較統語論－尺度名詞構文の出現と通時的变化と現状－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 影山太郎・岸本秀樹（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』（くろしお出版）	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川芳樹	4. 巻 単行本
2. 論文標題 cub構文のQBNP分析と統語的構文化	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語学の現在(いま)を知る26考（丸田忠雄先生御退職記念論文集）	6. 最初と最後の頁 173-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川芳樹・長野明子・菊地朗	4. 巻 単行本
2. 論文標題 概観 言語変化・変異の研究とコーパス	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川芳樹	4. 巻 単行本
2. 論文標題 日英語の等位同格構文と同格複合語の統語構造と構文化についての一考察	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論	6. 最初と最後の頁 284-306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 小川芳樹
2. 発表標題 日本語属格主語文の通時的縮約と最小構造の原理
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni, and Yuichi Wada
2. 発表標題 A Case for an Ongoing Left Periphery Truncation of Finite Clauses: Evidence from Adverbs' Compatibility with Genitive Subjects in Japanese
3. 学会等名 Workshop on Cross-linguistic Variation in the Left Periphery at the Syntax-Discourse Interface (as part of the SNU Conference on International Conference on Linguistics) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni, and Yuichi Wada
2. 発表標題 Syntactic Gradience between Finite Clauses and Small Clauses: Evidence from a Diachronic Change in Genitive Subject Clauses in Japanese
3. 学会等名 The Shaping of Transitivity and Argument Structure 2018 (University of Pavia, Italy) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新国佳祐・和田裕一・小川芳樹
2. 発表標題 形式名詞の文法化と属格主語について
3. 学会等名 言語変化・変異研究ユニット第5回ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川芳樹
2. 発表標題 「Xは高い」と「Xは高さがある」の比較から見た度量表現と程度表現の 統語構造
3. 学会等名 言語変化・変異研究ユニット第5回ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni and Yuichi Wada
2. 発表標題 Nominative/Genitive Conversion in Japanese and Syntactic Clause Shrinking Now in Progress
3. 学会等名 Linguistic Association of Canada and the United States (LACUS) 2017 Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川芳樹
2. 発表標題 副詞「かなり」を包摂する派生名詞と複合名詞の統語的構文化と共時的制 約について
3. 学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第4回ワークショップ『コーパス・多人数質問調査からわかる言語変化・変異と現代言語理論』（東北大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 新国佳祐・和田裕一・小川芳樹
2. 発表標題 ガ/ノ交替の容認性世代間差から見る進行中の構造変化について～所有形 容詞文と属性叙述文とコピュラ文の比較から～
3. 学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第4回ワークショップ『コーパス・多人数質問調査からわかる言語変化・変異と現代言語理論』（東北大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川芳樹
2. 発表標題 明治時代以降の出版物に含まれるガ/ノ交替の頻度の通時変化と共時的変異の様相 ~ジャンル・出版年・著者生年・性別・出身地別の分類結果が示すもの~
3. 学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第4回ワークショップ『コーパス・多人数質問調査からわかる言語変化・変異と現代言語理論』（東北大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川芳樹
2. 発表標題 名詞化接辞「家/屋」の形態統語的拡張用法と「句の包摂」について
3. 学会等名 Morphology & Lexicon Forum 2017（甲南大学）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 新国 佳祐・和田裕一・小川芳樹
2. 発表標題 文の容認性世代間差から見る言語変化 ガ/ノ交替に着目して
3. 学会等名 日本心理学会第81会大会（久留米大学、ポスター発表）（大会優秀発表賞を受賞）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshiki Ogawa, Keiyu Niikuni, and Yuichi Wada
2. 発表標題 A Case for an Ongoing Left Periphery Truncation of Finite Clauses: Evidence from Adverbs' Compatibility with Genitive Subjects in Japanese
3. 学会等名 Workshop on Cross-linguistic Variation in the Left Periphery at the Syntax-Discourse Interface (as part of the SNU Conference on International Conference on Linguistics) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川芳樹
2. 発表標題 属格主語を含む関係節・形式名詞節の通時的な状態化と語彙化について
3. 学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第3回ワークショップ『内省判断では得られない言語変化・変異の事実と言語理論』
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 新国佳祐・和田裕一・小川芳樹
2. 発表標題 ガ-ノ交替の容認性を規定する諸要因 Web質問調査に基づく世代間比較
3. 学会等名 「言語変化・変異研究ユニット」第3回ワークショップ『内省判断では得られない言語変化・変異の事実と言語理論』
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Yoshiki Ogawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 TalkBank	5. 総ページ数 データベース
3. 書名 Ogawa Corpus	

1. 著者名 小川芳樹・柴崎礼士郎（編訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 約435ページ
3. 書名 言語はどのように変化するのか	

1. 著者名 小川芳樹・長野明子・菊地朗（編著）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 454
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論（ISBN: 978-4-7589-2232-6 C3080）	

1. 著者名 Yoshiki Ogawa	4. 発行年 2016年
2. 出版社 TalkBank	5. 総ページ数 ウェブ掲載のためページ付与はなし
3. 書名 Ogawa Corpus. (ISBN: 978-1-59642-879-9 / doi:10.21415/T5H314)	

1. 著者名 原口庄輔・中村捷・金子義明（編）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 798
3. 書名 チョムスキー理論辞典（増補版）（この中の6項目を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>CHILDES (Child Database Exchange System) https://chilides.talkbank.org/browser/index.php?url=Japanese/Ogawa/ 言語変化・変異研究ユニット http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/ 言語変化・変異研究ユニット http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/home.html 日本心理学会 学術大会優秀発表賞 https://psych.or.jp/prize/conf/ コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 http://www.kaitakusha.co.jp/book/book.php?c=2232 Ogawa Corpus https://chilides.talkbank.org/access/Japanese/Ogawa.html Ogawa Corpus. Pittsburgh, PA: TalkBank http://chilides.talkbank.org/browser/index.php?url=Japanese/ 言語変化・変異研究ユニット http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/home.html</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----